



映画雑感7

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

「海よりもまだ深く」で離婚に追い込まれるだめ亭主を絶妙に演じた阿部寛が、今回は妻の隠し持っていた離婚届を偶然見つけて狼狽し、右往左往する情けない夫をコミカルかつリアルに演じています。

▼昨年12月から今春までの邦画から。まず昨年12月の「海賊と呼ばれた男」。百田尚樹のベストセラー小説の映画化ですが、日本人の礼賛としてではなく、既得権と権力と闘い続けた企業経営者の生きざまとして捉えると、アニメル・スピリットを失った今日の企業社会への警鐘として今日的意義が認められます。

▼「恋妻家宮本」は、子供が結婚して巣立ち、二人切りになった熟年夫婦の物語。昨年、

▼「愚行録」は、直木賞候補作にもなった貫井徳郎の同名小説を新人監督石川慶が映画化。嫉妬や憎悪などから様々な悪行を重ねる人間模様ですが、東北大学理学部を卒業後、ロマン・ポランスキーを生んだポーランド国立映画学校で学んだ石川監督が、長編デビュー作品とは思えない空気感を感じさせる作品を完成させています。主演の妻夫木聡と満島ひかりの好演に加え、人間の愚かさを象徴するような

男を小出恵介が見事に造形して新境地を開いています。小出は最近17歳の女性との交際トラブルを週刊誌に報じられ、活動を休止していますが、犯罪の事実が確認されないのにも関わらず、出運作品の上映がすべて中止される日本社会のあり方は納得できません。

▼東京で突然大停電が起きて都市機能がマヒしてしまい、九州の実家を目指して脱出を図る一家を描いた「サバイバル・ファミリ」は、一見荒唐無稽な設定ですが、その中でうごめく人間模様は、大震災をたびたび経験した日本人にとってはリアリティのある世界でしょう。危機に直面した一家の再生と成長のドラマを支えているのは小日向文世と深津絵里という芸達者の存在感です。

▼性的マイノリティの恋人同士とその二人が預かることになった少女との束の間の幸福な家庭生活。「彼らが本気で編むときは」は、今でも周囲の無理解と嫌悪の目にさらされている人たちの心情と日常をリアルに映し出します。声高な主張ではなく、主役を演じた俳優陣の穏やかで自然な演技が、難しい問題を解きほぐして見せます。

▼「しゃぼん玉」では、親に捨てられて育ち、ひたたくりや強盗を繰り返してきた主人公が、山村の林道で怪我をした老婆を救ったことから、人間らしい生き方を学び、再生していきます。不器用で危険な香りを漂わせる林遣人と、凜とした生き方を貫く老婆を見事に体現した市原悦子が秀逸でした。